

「正戦論」1600年の歴史

△悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい▽△敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい▽（新約聖書マタイ福音書第5章）

キリスト教は、イエスがこう教えるように、本来は絶対平和主義を説く。だが「戦争などを経験する中で、キリスト教神学は現実政治との折衷案として、

『正戦論』を生み出してきた」。小原克博・同志社大教授(39)▽写真▽はこう説明する。



①戦闘員と非戦闘員を区別する②比例性がある(不正を正すのに必要以上の力を行使しない)——の2条件が求められる。

小原教授によれば、ローマ帝国がキリスト教を公認し国家と教会の関係が変化する中で、教父アウグスティヌス(354～430)が正当な戦争の理論の神学的な基盤を与えたという。アウグスティヌスは①自己目的のために戦ってはならない②他者を助けるためには戦う義務がある——とした。正戦論は13世紀のトマス・アクィナスを経て、17世紀にグロチウスらによって、「戦争への正義」として6条件、「戦争

における正義」として2条件が整えられていった。

「戦争への正義」は、①正当な理由がある②正当な権威による③比例性がある(結果として得られる善が戦争という悪にまさる)④最終手段である⑤成功への合理的な見込みがある⑥動機(目的)が正しい——の6条件が満たされなければならぬ。「戦争における正義」では、小原教授は、「欧米では歴史的財産として、今も正戦論が生きている。日本人は戦争の悲惨さから反戦を訴えるが、伝わりにくい。正戦論を踏まえて戦争を議論していくことが有効ではないか」と話す。平和▽善、戦争▽悪という二分法は、それぞれそ善悪二元論に陥る危険をはらむ。無意味で退屈の代名詞とされる「神学論争」こそが今、必要といえるかもしれない。